

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

A. コースワークの充実・強化

⑤他分野の大学院生との共同研究の実施

⑤他分野の大学院生との共同研究の実施

《理工農系》

●大阪大学理学研究科数学専攻

「数物から社会に発信・発進する人材の育成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

数物コアセミナーの名称の下で、数学を専攻する学生と物理学を専攻とする学生を混合したグループでのセミナーを行った。RAの学生をまとめ役として実施したが、専門を異にする学生とのコミュニケーションは難しく、セミナーの内容が中途半端なものになりがちで、実施後の学生アンケートの結果も芳しくなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

専門を異にする人に自分の研究内容を伝えようとするとき、議論をするに値する深い内容に達するのは難しい。これは成熟した研究者でもそうなのであるから、学生ならばなおさらである。これを無理に行うと、内実の伴わないものになってしまう危険性がある。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

1年目の結果を基に、2年目は同じ形態で実施するのは中止した。専門が異なるものの共同のセミナーを内実を持たせるためには、学問間の理解がより深まった状態で始めるべきで、学生のレベルでするのは無謀と判断した。これは大学院教育改革よりもより研究の最先端で行うべきことと考える。

《医療系》

●名古屋市立大学薬学研究科

「薬工融合型ナノメディシン創薬研究者の育成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

1年目に異分野の講義を受け、2年目に異分野研究体験(インターンシップ)を短期で行ったが、やはり、異分野であることの壁はなかなか大きく、異分野研究体験(インターンシップ)のうまくいった組合せもあったが、多くは刺激にはなったがあまり自分の研究へのフィードバックや共同研究への発展にはつながらなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

名古屋工業大学、名古屋市立大学という、それぞれ独自の文化で研究や教育が進んできたので当然であるが、両大学・両分野の間でかなりのギャップが顕在化した。学生たちの柔軟な頭と教員側のすくなくならずの努力によって克服できるものと考えていたが、知識や

## 2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

### A. コースワークの充実・強化

#### ⑤他分野の大学院生との共同研究の実施

技術はもちろんのこと、様々な環境や哲学があまりにも違うことにあらためて思い知らされた。これがその後のモチベーションの向上や維持にうまくつながらなかったものと思われる。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

もう少し早い時期、学部レベルから連携を開始すべきである。1年の教養教育において、名市大・名工大共通科目を設定して、統一化を図ることも効果的かもしれない。例えば、「薬学概論」や「工学概論」のような導入教育も必要であろうし、実習も一部共同で行うことができればハードルもかなり下がってくるのではないかと思う。幸いにも、平成23年度から名古屋工業大学の物質工学科3年(学部)を対象に「薬科学概論」という名古屋市立大学大学院研究科の教員による講義(薬理学、薬物代謝学、薬学経済学)が開講し、100人近い学生が受講をし、好評を得ている。